

テオドール・シュトルムと音楽

田 中 宏 幸

《詩人と音楽》 *Dichter und die Musik* というテーマには古くから多くの関心が寄せられている。例えばモーザーの音楽辞典には、この見出語のもとに3ページ以上にわたり、多数の一般的文献や、特定の詩人・作家についての文献が挙げられている⁽¹⁾。

そもそも、詩人・作家と音楽、そして文学と音楽・音楽家の相互関係は実に多彩であり、しばしば貴重な影響を及ぼし合うものである。

抒情的小品《みずうみ》 *Immensee* で知られている19世紀北ドイツの詩人テオドール・シュトルム *Theodor Storm*⁽²⁾ にとっても、このテーマはふさわしい。音楽はこの詩人の生涯の伴侶であり、慰めであり、喜びであったからである。シュトルムは美しいテノールの声の持主であり、巧みにピアノを弾き、自ら合唱団を指揮し、数は少ないが作曲も試みたのであった。当然、その文学作品には数多くの音楽や音楽生活の情景が描かれている。例えば、慎ましやかな市民的音楽家像を描いた《静かな音楽家》 *Ein stiller Musikant*⁽³⁾ はその意味での代表作であるが、これは音楽家志望の感情豊かな、しかし十分な才能に恵まれなかった息子のカールの将来の姿を求めて書かれたものである。更に、情熱的な愛の歌と、渋いくすんだ独特の北ドイツの自然の美しさを歌った響き豊かな抒情詩も、彼の音楽性の所産に他ならない。これはまた、作曲家の心をとらえ歌曲を生み出す。

つまり、シュトルムにあっては、まず音楽家としての詩人、その文学作品における描写素材としての音楽の問題、そして、より根元的な次元で、その文学の言葉に見られる詩人の音楽性、そしてその抒情詩による歌曲と、このテーマは多面的にかかわり合ってくるのである。

ここに、その最も具体的な、音楽家としてのシュトルム像を、その生涯の伝えられる《楽興の時》を辿りながら明らかにしたいと思う。シュトルム文学へのひとつの道がここにあると思うからである。

I フーズムでの少年時代

詩人自ら《私の生まれた町は、何の飾りもない町にすぎない》と描き、又《海辺の灰色の町》 *graue Stadt am Meer*⁽⁴⁾ と歌ったフーズムは、北海のほとりの小さな、文化的にも見るべきもののない田舎町であった。商業の中心地として隆盛の時代もあったらしいが、これは16世紀を頂点として次第に衰え、当時は、昔の諸旧家も没落し文化的にも低調であったという⁽⁵⁾。かつて17世紀末には、フーズムでも、あのニコラウス・ブルーンズ⁽⁶⁾ が教会オルガニストとして活躍し、バッハ以前の注目すべき教会カンタータやオルガン曲が鳴り響いたのであったが、詩人が生まれた

頃には、教会音楽もとるに足らないものになっていた⁽⁷⁾。こういう状況であるから、学校教育でも音楽は——そして文学も——無視されていた。4才から通った私立初等学校でも、9才から通ったギムナージウムでも音楽は教えられていない。しかし、少年シュトルムが当時この教会オルガニストであったヴィント⁽⁸⁾に個人レッスンを受けたことが伝えられている。シュトルムは、この音楽の先生についても、又そのレッスンについても後に全く語っていないようであるが、それはこのレッスンが基礎的なテクニックに限定されたものであり、精神的な影響は受けなかったからと推定することは正しいであろう⁽⁹⁾。とはいえ、音楽では、この基礎的テクニックは不可欠である。この個人レッスンは、やはり詩人の後に開花する才能のための基礎として、まことに幸いなことであった。ここで更にシュトルム伝の著者シュトゥケルトのように、未来の詩人のために本当の意味での文学的教養の可能性は非常に少なかったが、音楽においては、既に少年時代から、当時の芸術との活気あるふれ合いがあったようだと推定することさえ可能かも知れない。彼は《優れた歌唱とピアノ演奏の音楽的教養の基礎は、フーズム時代におかれたに違いない》と確信し、《明らかに、既にモーツアルト、ヴェーバー、シューベルトというような、詩人が生涯忠誠を尽くし、尊敬し愛した巨匠たちに、ここで出会ったのだ》と断言している⁽¹⁰⁾。ありうることである。

II リューベック時代⁽¹¹⁾

1835年秋、父は18才のシュトルムを、当時新人文主義の教育で有名であったリューベックのカタリーネ・ギムナージウムに入学させる。この学校では音楽も教育に取り入れられていたうえに、リューベックは当時、北ドイツではハンブルクに次ぐ大都会で、文化レベルも高く音楽も盛んであった。当然、ここでの1年半は、将来の詩人シュトルムの上に、文学面でも音楽面でも大きな、かつ決定的な影響を及ぼすことになる。

丁度シュトルムが入学した1835年頃から、学校では歌曲やオラトリオの作曲で当時知られていたカール・モッシュェ⁽¹²⁾なる先生により、歌唱と音楽理論が教授され、詩人もこの講義に出席し、又その指導のもとに歌ったことが伝えられている。

更に、豪商でスウェーデン領事のネルティング邸⁽¹³⁾での度々の芸術サロンの集いも彼に影響を及ぼす。ネルティング夫人は、音楽の才に恵まれ、自らピアノを弾き、特にベートーベンを好んだとされているが、この夫人を中心にリューベックの芸術家たちが集まり、文学と音楽のサロンが催されたのである。詩が朗読されたり、楽しい音楽が演奏されたという。シュトルムは、文学的にも大きな影響を受けた友人のレーゼ⁽¹⁴⁾や、あの詩人のエマヌエル・ガイベルなどの紹介でこの集いのメンバーとなった。ガイベルは柔かなバリトンでフランツ・クーグラ⁽¹⁵⁾の詩によるヘルマン・ドゥンカー⁽¹⁶⁾の歌曲を好んで歌ったと伝えられているが詳細は分からない。又美しいテノールの持主のシュトルムが何を歌ったのか、又ピアノを弾いたのかなどについては何も伝えられていない。ただ詩の朗読については、さほど好評ではなかったらしい。それは後の抒情詩人は未だ熟していなかったから、当然のことであろう。この点ガイベルは既に好評をばくしていたという。

ネルティンゲ邸には又、聖マリア教会のオルガニスト兼音楽監督のゴットフリート・ヘルマン⁽¹⁷⁾も出入していたらしいが、このヘルマンは、例えば1836年冬にはリュubeckで実に20回以上のコンサートを開催したと伝えられているが、その活躍ぶりとその町での盛んな音楽生活が想像される。そして、彼が率いるオラトリオの合唱団では、カタリーネ・ギムナージウムの生徒たちも歌ったと伝えられているので、シュトルムも又、他の音楽好きな生徒たちと共に合唱団に加わったと思われる。シュトルムがリュubeckに滞在した当時演奏されたプログラムには、ヘンデル《サムソン》、《ユーダス・マカーベウス》、《イシアス》、《テ・デウム》、ロンベルク⁽¹⁸⁾《詩篇100》、モッシェ《詩篇147》、ハイドン《天地創造》、パレストリーナ《インプロペーリエン》、ケルビーニ《讃歌》、グラウン⁽¹⁹⁾《イエスの死》、レーヴェ⁽²⁰⁾《イエルサレムの崩壊》、メンデルスゾーン《聖パウルス》、グルック《タウリスのイフィゲーニエ》など多彩な曲目が伝えられている。後にシュトルム自ら、このような曲目を演奏しているが、やはりここでの大きな感銘に基づくものといわなくてはならないであろう。もち論、ヘルマンとモッシェの指導下に、指揮法や合唱音楽のテクニックと音楽の表現法を身につけたと思われる。

この時代の最後に、はじめて作曲の試みを行ったことが伝えられているのは興味深い。1836年のクリスマスに、シュトルムは母方の親戚であるハンプルクの豪商シェルフ家で、そこで育てられていたベルタ・フォン・ブーハンなる魅力的な少女に恋をする。彼はこのベルタのために童話を書いたり、民謡を送ったりしたが、又ささやかなリートを作曲して彼女のために歌ったといわれている⁽²¹⁾。しかし、この作品の楽譜は残されていないし、又詩についても不詳である。この作曲には、恐らくモッシェの音楽理論の教育がその基礎を提供したに違いない。ベルタには、その後も思いを抱き続けるが、結局1842年実らないままに終局を迎えている。

1837年春、シュトルムは父の希望に従いキール大学で法律を学ぶためにリュubeckを去る。

III キールとベルリンでの学生時代

さて当時のキールは人口もリュubeckの3分の1程度で、文化的にも活気に乏しい町であったと思われる。従ってリュubeckのような音楽生活については伝えられていない。

代りに故郷フーズムでのこの頃のハウスムジークの様子が伝えられている。学生のシュトルムは休暇で帰郷すると、きまって玄関の右側の音楽部屋に入ってピアノを弾いたり、歌ったりして急に賑やかになるので、彼が帰ってきたことが、訪れる人には皆すぐに分かったという⁽²²⁾。休暇中に彼は2才年下の妹のヘレーネに外国語を教えたりもしたが、又その友人たちも交えて声楽の指導をしたりして、楽しい二重唱や三重唱の歌声が響いていたらしい。知合のイェンゼン姉妹にも声楽を教えたいらしいが、その練習はしばしば厳しく、二人の少女は顔をほてらせ腹を立てて部屋からとび出してくることもあったと伝えられている。こうした音楽の練習の際の厳しさは、後の合唱団についても伝えられている⁽²³⁾。シュトルムの作品には、しばしば音楽のレッスンの場面が描かれているが、このような少女たちとの声楽の練習は、例えば《城にて》⁽²⁴⁾の場面を思い起させよう。

1838年春、シュトルムは友人のレーゼがいたベルリン大学に転ずる。ベルリンはもち論大都会で大学もキールの僅か 200人の学生にくらべて 1,700人を擁するドイツ最大の大学であった。専門の法律は有名なフォン・ザヴィニー⁽²⁵⁾などの名教授の講義を聴いているが一般教養的な、例えば哲学の講義などは全く無視していたらしい。しかし劇場やオペラ劇場は、しばしば訪ねている。特にザイデルマン⁽²⁶⁾がメフィストを演じるファウストは印象的だったらしく、後々までよく語ったと伝えられている。又ジングアカデミーの演奏会にも、しばしばでかけている。シュトルムはここでは専ら聞手であったようであるが、これも又必要なことであり、後の合唱団での有能な指導を可能にするような様々の知識と教養を深めることができたであろう。同様1838年友人たちと5人ででかけた4週間にわたるドレーズデン旅行も、研修の旅であった。朝から美術館をめぐったり、宮廷劇場の当時の名優たちの上演を観賞したり、又シュレーダー・ドゥブリアン⁽²⁷⁾の歌うオペラなどを楽しんでいる。

ベルリンでの積極的な活動は、友人のレーゼなどの学生や市民の女性などを交えての《テアトル・アラ・スカラ》なる劇団に加わったことであろう。これはどちらかといえば娯楽のためであったらしいが、この一部が《1839年ベルリン学生時代のあるエピソード》⁽²⁸⁾として残されていて、シュトルムが作曲もしたことが伝えられている。しかし楽譜などは残されていない。

この秋シュトルムは再びキール大学にもどる。今回はここで彼は多数の同郷の友人たちと交流し、多くの精神的刺激を受ける。特に後の有名な歴史学者テーオドル・モンゼンと、その弟のテュヒオ、それにゲルマニストのミュレンホフと親交を結んだ⁽²⁹⁾。ここで南ドイツの詩人メーリケを発見し、又自作に対する痛烈な批評もされたりして啓発されるのである。モンゼン兄弟とシュトルムは、この交流の成果として後に1843年《3人の友の歌集》⁽³⁰⁾を刊行している。又1841年頃からテーオドル・モンゼンとシュトルムはシュレースヴィヒ・ホルシュタイン地方の伝説、童話、民謡などを蒐集しているが、これにミュレンホフが加わり、その成果は、その著作のために提供された。このような民謡蒐集の体験は、あの《みずうみ》のシーンに利用されていて興味深い。

1842年秋シュトルムは終末試験に合格し、翌年2月フーズムに帰る。

Ⅳ フーズムでの弁護士時代

フーズムに帰ったシュトルムは又、たびたび玄関の横の音楽室で、ヘレーネの伴奏でメンデルスゾーンやシューベルトのリートを歌い、又共に二重唱を歌ったりしている⁽³¹⁾。

彼はしばらく父の弁護士事務所で手伝った後、4月20日に自ら弁護士として開業する。同じ頃、彼は早速合唱団を設立している。つまり彼にあっては、文筆生活よりも、まず音楽にその情熱が注がれるのである。ゲルトルートの伝える所では、最初団員は婦人が10人、男性が8人であったが、既に同年の8月21日には最初の演奏会を行っている。その興味ある曲目は次のようなものであった。⁽³²⁾

I. Abteilung.

1. Ouvertüre.
2. Morgengebet von Mendelssohn-Baltholdy.
3. Jägers Abschied, Männerquartett von demselben.
4. Konzertino für zwei Flöten mit Pianoforte von Kummer.

II. Abteilung.

1. Ouvertüre.
2. Bergmannslied, Männerquartett von Glaser.
3. Was bleibt und was schwindet von Romberg.

第1部の1.の《序曲》はどんな曲か分からないが、後のハイリゲンシュタット時代のプログラムから察するに、ピアノ——場合によっては連弾で——で奏されたと想像される。2.の《朝の祈り》はアイヒェンドルフの詩による op. 48, 5 で無伴奏混声合唱曲であろう。3.の《狩人の別れ》も同じ詩人による op. 50, 2 で、これは男声合唱曲であるが四重唱で歌ったものである。多分テノールはシュトルムが歌ったことであろう。アイヒェンドルフはシュトルムが尊敬し又影響を受けた詩人でもあった。4.《フルート2部とピアノのためのコンチェルティーノ》は、今日ほとんど知られていない、南ドイツ、コーブルクのフルート奏者で作曲家のカスパール・クンマー⁽³³⁾の作品であろう。

第II部にも《序曲》がかかげられている。2. 男性四重唱の《山びとの歌》は18世紀南ドイツの作曲家グラザー⁽³⁴⁾の曲であろう。最後の曲《とどまるものと消え去るもの》の作曲家ロンベルクについては注18を参照されたい。感傷派の詩人コーゼガルテン⁽³⁵⁾の詩による op. 42, 伴奏付の合唱作品らしいが詳細は分からない。

このプログラムの構成は恐らくシュトルムの手になるものと思われるが、これを見ると当時のフーズムでの演奏会と彼の活躍ぶりが髣髴とするのである。われわれにとっては、なじみのうすい作品かも知れないが、器楽も配されて、余り高度な要求をもつとは思われない作品らしく、当時の人びとにとっては楽しいコンサートであったと思われる。

8月27日付のフーズム週間紙は《熱心さと喜びとを持つなら、短時日に満足な事がなされうるという証拠を示した。……すべての曲目の演奏には、注文をつけるような所はほとんどなかった。全聴衆も又このことを認めたし、今後の演奏会にはますます多くの関与をもって、この合唱団の発展を勇気づけるであろう。……》と好意的な批評を掲載している⁽³⁶⁾。

この後、シュトルムは更に、マリア教会で宗教音楽の演奏会を計画する⁽³⁷⁾。最初、音楽に対して理解を示さない教会関係者からの反対に会うが、何度かの交渉の末、オルガンとトロンボーンの伴奏を用いるという条件で許可された。しかし彼が計画していた曲目には、ピアノ伴奏譜がなく、ピアノを持込むことを再度頼み込み、何とかうまく行きそうに思われた。そこでフーズム週間紙に1844年3月27日、この演奏会の広告が掲載された。その曲目は、まずブレスラウのオル

ガニストであったヘッセ⁽³⁸⁾の《オルガンのためのアダージョ》、《自然における神の栄光》、モーツアルト《レクイエム》の3曲であった。2曲目はゲレルト⁽³⁹⁾による有名なベートーベンの曲であろう。原曲は独唱歌曲である。これらの曲が教会で演奏されることは、まことにふさわしかった。にもかかわらず間際になって、この演奏会の教会での開催が拒絶されたのである。止むなく《聖ユルゲン修道院》の礼拝堂でこの演奏会は催された。その成果などについては何も報じられていないが、このコンサートで、シュトルムは指揮をすると同時に、テノールの独唱も受持ったことが伝えられている。又伴奏は妹のヘレーネとフェダーゼンという名が連ねられている。モーツアルトのレクイエムは、周知の如く、必ずしも容易な曲目ではないから、この合唱団もかなりのレベルに達したものと想像されるのである。シュトルムの熱意がうかがわれる。

又、バスの団員には4人のギムナージウム生が加わっていて、シュトルム自身のリューベック時代を思い起させる。但し、この曲をリューベックで演奏したかどうかは分からない。ひょっとしたらベルリンで聴いたかも知れない。

シュトルムの熱心さは、又メンバーのひとりの手紙のなかに伝えられている⁽⁴⁰⁾。彼の性格を知るのにも参考となり興味深いものがある。《彼は熱気と烈しい情熱をもって指揮しました。練習の時には非常に烈しくなることもありました。手助けをしていた彼の妹のヘレーネは特にしばしば皆の前で叱られました⁽⁴¹⁾。満足な具合に歌われないと、額に不機嫌なしわを寄せ、私たちはふるえ上ったものでした。最後の音が消えると、シュトルムは黙ってピアノをしめ、そそくさとコートを着てさっと帰ってしまいました。お茶でも飲んで、お菓子でも食べ、どうかするとダンスでもしたいと思っていた団員たちは、あきれてしまい、もう二度と来ないでおうと誓ったものでした。でも次の練習には又皆集りました。いっしょに歌う喜びが、余りにも大きかったのです。》これによって、われわれにはシュトルムの指揮者としての姿と同時に、当時のドイツの片田舎の市民の音楽生活の一端がうかがえて興味深い。

シュトルムのフーズムの最初の晴れやかな《楽興の時》のひとこまである。こうして彼は、あの《飾りのない町》に文化的な香りをまず音楽の形でもたらすのである。

自立の生活の基礎を築いたシュトルムは1844年従姉妹のコンスタンツェと婚約する。彼女は早速、その柔かい豊かなアルトの声で、合唱団の有力な援助者となる。

コンスタンツェと婚約した頃、第3番目の作曲が試みられ、これは楽譜も伝えられている。これはあの友人レーゼの詩に作曲したもので《アントーン・ヴァンスト氏が従兄弟のミッヒェルの最後の手紙を読んだ時に歌った歌》という長い題がついている⁽⁴²⁾。詩も音楽も深い内容をもつ作品ではなく、《速く跳ぶように》*schnell und hüpfend*と指定されたへ長調の素朴な民謡調のリートである⁽⁴³⁾。

さて、1846年9月シュトルムは、かねて婚約していたコンスタンツェと結婚する。それに先立って、父の援助により古いが快適な家を手に入れている。この家の後には、榆と菩提樹に囲まれた庭があって、ここにコンスタンツェが好きなバラが植えられ、更にジャスミンやライラックが配された。こうして、幸福な結婚生活がスタートした。1847年の夏には、この家ではじめて33人

の客を招いてパーティが催される⁽⁴¹⁾。ささやかなコンサートは、もち論欠かせなかった。シュトルムの歌はすばらしく、又知人のドクトルがクラリネットを奏したという。このドクトルはその後、しばしばシュトルム家を訪れ、夜おそくまで過している。シュトルム家での心地よいハウスムジークと、社交好きなシュトルムの姿が浮かんでくる。

ところが、新婚間もなくドロテア・イェンゼン⁽⁴²⁾なる魅力的な女性が現れ、詩人は動揺し、このためシュトルム夫妻の間は必ずしも平穏というわけにはいかなかったらしい。しかし1848年ドロテアがフーズムを去るに及んで、この緊張は解消したようである。このような愛の体験は、多数の抒情詩と初期の散文作品への創作欲をかき立てたことであろう⁽⁴³⁾。この時代大凡10年間には又、彼の生涯で最も多数の抒情詩が生まれたのであった。こうして彼はフーズムに文学的にも潤いをもたらすのである。

しかし、間もなく政治的不安のために、シュトルムの最初の情熱の発露であった合唱団は、その練習を1848年には休まざるをえなくなった。つまり、この頃からフーズム地方も併合を求めるデンマークとこれに反対するシュレースヴィヒ・ホルシュタイン地方の民衆運動の蜂起とで騒然としてくる。結局1852年公国の自治は認められたが、デンマークの支配下におかれ、シュトルムも反デンマーク的態度をとったということで、弁護士としての職が禁止される。こうして詩人は愛する故郷を去ることになる。

V ベルリン・ハイリゲンシュタット時代

フーズムを去ったシュトルムは、まずベルリンで職を求め、どうにかポツダムに陪席判事のポストをあてがわれる。しかし、ここでの3年間は、詩人の生涯で最も苦難に満ちた時代であった。親切な父の援助がなければ、とても暮して行けないくらいの状況であったらしい。もっとも、この時代にシュトルムは、以前から尊敬していたアイヒェンドルフに会う機会に恵まれたし、又ベルリンの文化人たち——フォンターネ、クーグラー、画家のアドルフ・メンツェル、そしてパウ・ハイゼなどと交流し、あのガイベルにも再会できたのであった。更に1855年、両親からプレゼントされた南ドイツ旅行の際には、数年前より文通していたメリーケを訪ねている。メリーケは丁度《旅の日のモーツァルト》⁽⁴⁴⁾を完成したところであった。その翌年にはしばらく故郷のフーズムに滞在することもできた。これらがこの時代のいわばわずかの陽のあたる出来事であった。ポツダムでの3年間は、ともかくも本もなければピアノもないという本当にみじめな生活であった。《楽興の時》は望むべくもなかったであろう。文筆生活も滞り、作品もほとんど生れていない⁽⁴⁵⁾。ただ裁判所長のフォン・ゴスラーがチェロを弾き、そのお茶の会での音楽や文学の話が唯一のくつろぎの一時であったろう。

しかし注目すべきことに1854年の5月にテナーという詩人のロマンス《狩人の娘》に作曲を試みている⁽⁴⁶⁾。これはピアノ伴奏付きの初期ベルリン・リート楽派風の16小節、イ長調のささやかな歌曲であるが、確かに10年前の作品より細やかなメロディの動きと和声が用いられている。コンスタンツェの誕生日に贈ったと伝えられている。苦難の生活の中での何よりのプレゼントで

あったろう。

この生活はしかし、やがて1856年7月ハイリゲンシュタットの地方裁判所判事に任ぜられて、いくらか好転する。9月にここに赴任した。依然として経済的には苦しく、父の援助が必要であつたらしいが、人口 6,500人の静かな町での生活は、精神的にもゆとりと安らぎを覚えたことであろう。それを反映してか、文学作品も注目すべきものが書かれる⁽⁵⁰⁾。

ゲルトルートによると、シュトルムはここでも落着くや翌年には合唱団を設立している⁽⁵¹⁾。最初は14人のメンバーで発足した。これは後に1863年頃には70人もの大合唱団に成長したらしい。そのため市役所のホールで練習しなくてはならなかったと伝えられている。ピアノの伴奏はライマンという師範学校の先生が協力してくれ、シュトルムはタクトを振った。フーズム時代と異なり、短気ではなくなっていたが依然として厳しく、特に正確なアインザッツを要求したらしい。正確さのために《合唱団の時計》というニックネームを付けられている。こうして合唱団はやがて、メンデルスゾーンの《聖パウルス》を手がけ、シュトルムはステファヌス役を歌っている。この曲はリュベックのヘルマンのプログラムに含まれていた。その他、ピアノ三重奏を練習したらしい。

この頃のシュトルムの書簡に興味深い記述が見える。1860年4月6日にシュトルムは父にあてて次のように書き送っている⁽⁵²⁾。

《私たちの頑丈な立派なピアノのことを心の中でいつも感謝しています⁽⁵³⁾。手をふれない日は稀です。音楽は以前のように私の人生の伴侶となりました。私の合唱団は20人ぐらいのメンバーで4月17日に演奏会を開きます。お母さんのためにプログラムを付け加えます。Ⅰ部 ルートヴィッヒ・シェルフ⁽⁵⁴⁾のピアノ連弾の序曲、メンデルスゾーンとエーレルト⁽⁵⁵⁾の混声合唱曲2曲、ロンベルクの〈とどまるものと消え去るもの〉、Ⅱ部 メンデルスゾーンの最初のヴァルブルギスの夜⁽⁵⁶⁾、Ⅲ部 ヴァイオリンとチェロを伴う独唱です。

合唱団の力量は、このような小さなグループでは稀なくらいすばらしく、全員真面目にしかも喜んで事が運ばれますので、火曜日の夕方は楽しみです。火曜日毎にメンバーの家に交代で集まるのですが、たくさんの感じのいい人たちがいます。今ヴァルブルギスの夜を練習していますが、以前フーズムで歌った時は少しおそすぎたように思います。当時のフーズムのメンバーでは力量が不足していましたから、ちゃんとしたテンポではできなかったでしょうけど。ただクロークのようなソリストはいません。》

これによってシュトルムはフーズムでもヴァルブルギスの夜を演奏したことが分かるが、最後に言及しているクロークは、フーズムの当時の長官の娘で合唱団のプリマ・ドンナであつた。シュトルムがその豊かな音楽性に心をひかれていたことは、彼女の婚約の際に贈った《アウグステ・フォン・クロークに寄す》という詩で知られる⁽⁵⁷⁾。

1863年2月8日、19日の書簡も興味深いものがある⁽⁵⁸⁾。

《…2週間前にコンサートをやりました。メンデルスゾーンの詩篇42、ハイドンの嵐の合唱⁽⁵⁹⁾、メンデルスゾーンの男声四重唱2曲ストラデッラの合唱曲〈鐘の音〉です。

今同時にふたつの演奏会の準備をしています。I グルックのオルフォイス、モーツアルトのフィガロと魔笛、ヴェーバーの魔弾の射手1幕などからのオペラの曲、II ヒラーの大オラトリオ〈イエルサレムの崩壊〉⁽⁶⁰⁾です。70人ぐらいの団員がいます。週に2度夕方7～9時に練習いたします。お母さん、もしあなたがそこにいらっしたらと思います。体が疲れていても、一日の仕事が終わった後での本当の気晴らしになります。》

わずかの間に合唱団は大きく成長していることが分る。練習も週2回と増えてシュトルムの熱心な活躍ぶりがうかがわれる。

この後間もなく1863年4月10日には、シュトルムは合唱団から感謝のパーティーに招かれ、当時練習していた《イエルサレムの崩壊》に因んだ銅版画を贈られている⁽⁶¹⁾。

この時代の他のいくつかの《楽興の時》を紹介しよう。

1859年5月4日の書簡では、毎日30分程づつピアノを練習していること、そしてベートーベンのヘ短調ソナタが弾けるようになったと報じている。同じ書簡で更に《歌の茶話会》を催していることや、そこでピアノ三重奏を演奏したことが伝えられている。そして《歌の茶話会は夜半前に終ることは稀です。それは、でも小さな町での生活を、ささやかながら豊かにするものです》と結んでいる⁽⁶²⁾。

更に1859年9月22日の書簡には、オルデンブルクから旧友のベッカーが訪ねて来て、4日間にわたり彼の伴奏で《最近の4年間以上に》歌ったと書かれている。

又《みづうみ》に挿絵を画いた画家のピーチュの報ずるところでは、シュトルムは自らピアノを弾きながらシューマンやシューベルトの歌曲をしばしば歌い、又コンスタンツェの伴奏もした⁽⁶³⁾。従兄弟の作曲家シェルフが訪ねて来ることもあり、合唱団員と一緒に近くの山に登り、シェルフの四重唱曲を歌ったりもしている⁽⁶⁴⁾。

音楽にとりまかれた生活が続いている。

しかし、このハイリゲンシュタットでの生活にも終りが近づいて来た。1864年2月シュトルムはフーズムから《州知事》*Landvogt* として招かれる。これより前彼は1860年頃から故郷へ休暇毎に帰りその人びととの結びつきを深めていた。最初彼は迷うのであるが、この申し出に従うことに決心する。そしてハイリゲンシュタットでの最後の演奏会が催されるのである。当時の心境は父あての1864年3月10日の書簡で知ることができる⁽⁶⁵⁾。故郷に絶えず帰りたいと思っていたシュトルムではあるが《私の心は、ここからの別離のことを考えると痛みます。第2の故郷から別れるような気持です》とこの8年間を懐かしんでいる。静かな小都市で、シュトルムにとっては好ましい充実した生活を送られたのであったから。

最後のコンサートは3月9日に行われた。何度も話題になり5年3カ月もかけて練習したヒラーの《イエルサレムの崩壊》が演奏された。《最後に、私の設立した合唱団の50人以上の団員の豊かで華やかな合唱を指揮し、みんなの目が私のバトンに向けられ、音の波が今これを最後にと、感激した人びとの胸の中から、さざめくようにほとぼしり出て来た時には、私は涙にぬれないようにと気をしっかりと保たなければなりませんでした。私も歌いました。感動した気持で、力強

い声で……歌いました。物音ひとつしませんでした。全コーラスが鳴り止んだ後に、あんな風に歌い、又聴かれることは人生における最も幸福なひと時です。これが私にとってのこの町での最後でした。今晚は、私のための盛大な歓送会があります。》⁽⁶⁶⁾ とこの最後の演奏会の様子を伝えている。

この言葉の中には、そもそもシュトルムにとって合唱団や音楽は何を意味したのかが、暗示されているであろう。彼は特に社交的な集いを好んだが、音楽は又そのために、まさに理想的であった。なぜなら、音楽の《全本性、つまりそのうつろいやすい響きの世界での漂いは、社交性 *Geselligkeit* を目指している》のであるから⁽⁶⁷⁾。

VI 最後のフーズム時代

1864年3月フーズムに帰ったシュトルムは、その年の秋には又さっそく合唱団を設立し、翌年3月には最初の演奏会を開いている。そのプログラムなど詳細は分からない。しかし、やがて故郷に帰った幸福の代償として、大きな悲しみが訪れることになる。愛するコンスタンツェの死であった。

コンスタンツェは、シュトルム伝を書いたゲルトルトの出産後、出産そのものは軽く、その日はシュトルムも合唱団の練習に出かけたくらいであったが、その後容態が悪化し、間もなく世を去るのである。5月24日、早朝合唱団員の手で、亡きコンスタンツェの埋葬が終り火の消えたような家に帰るや、シュトルムはひとりピアノに向い、数時間にわたってピアノを弾き続けている。この演奏に、心を奪われないものはいなかったであろうと伝えられている⁽⁶⁸⁾。そしてその日に《深き影》という哀悼詩集の最初の1篇が書かれる。後の5篇は6月までに書かれた⁽⁶⁹⁾。

後に残された7人の子供達の世話は、ある英国婦人の手に委ねられたが、シュトルムは毎日、息子のハンスやエルンストとキケロを読んだり、カールにドイツ語の文法を教えたり、又音楽の才能があったリスベトにはピアノを教えたりしている。3男のカールは既にハイリゲンシュタットで、ピアノを弾き始めているからここでも練習を続けていたであろう⁽⁷⁰⁾。

途方にくれていたこの頃のシュトルムにとって、音楽は何よりの慰めであった。合唱団の練習はその後も1度も休まなかったようである。又その年の10月ピーチュへの書簡の中で《音楽は私にとっては本当の慰めです。音楽は本当に人生における私の忠実な伴侶でした。》と書き送っているのは注目されよう⁽⁷¹⁾。

シュトルムにとっての今一つの慰めは、ツルゲーネフ訪問の南ドイツへの旅であった。すなわちこの年の9月に彼はピーチュの紹介でこのロシアの詩人に招かれ、バーデン・バーデンに向う。途中、以前から文通していたオペラ歌手で詩人のエリーゼ・ポルコをまず訪ねている。彼女は病氣のために歌ってはならなかったのであるが、彼のために数曲リートを歌って歓迎している。アイヒェンドルフの詩によるシューマンの歌曲に特に感動したと詩人は故郷にあてて伝えている⁽⁷²⁾。更にフランクフルトでは、旧友テューヒョ・モンゼンを訪ねている。そして5日にバーデン・バーデンに到着し、13日まで8日間、ツルゲーネフ家の客として滞在する。ツルゲーネフは1863年

来ここに住んでいた。このロシアの詩人とのすばらしい交友に加えて、更に近くのヴィアルドー邸⁽⁷³⁾での集い、特にその演奏会は彼を楽しませたのである。ヴィアルドー夫人は名歌手で又作曲もしたが、ここで、彼女のメーリケの詩による歌曲が演奏されている。又ここで、あの《イエルサレムの崩壊》の作曲者ヒラーにも会っている。おそらくその作品のことが話題になったであろう。9月11日付けの家族への書簡には、次のように書かれている。《一昨日は夕方から夜半まで、ヴィアルドー家の庭園ですごしました。〈イエルサレムの崩壊〉の作曲家ヒラーもしばらく参りました。歌が歌われました——すばらしい音楽でした。私もヴィアルドーの美しい歌曲のひとつを彼女の伴奏で歌いました。彼女は親しそうにうなずいて〈シュトルムさん、すてきですよ〉といいました。》この集いにはツルゲーネフも同席していたであろう。その後、ヴィアルドー夫人、同席していたベルリン・オペラのプリマ・ドンナとロマンチックな月夜の散策を楽しんでいる。

この音楽に彩どられた8日間の滞在は、コンスタンツェを失った悲しみを、幾分やわらげてくれたのではあるまいか。

帰路、かつてポツダム時代に両親と旅したハイデルベルクに寄って、古城のつたのひと枝を父のために手折り、その時泊ったホテル・リッターの前で回想に耽っている。再びフランクフルトのモンゼンを訪ね、ケルン、ドルトムントを経てアルンシュタットに至り、ハイリゲンシュタット時代の友人を訪ね、フーズムに戻っている。

やがて1866年6月シュトルムはかつて情熱を傾けたドロテア・イェンゼンと再婚し、ヴァッサーライエ通りの広大な家に移る。コンスタンツェ亡き後、彼の創作の泉も涸れたかのようであったが、ドロテアとの再婚後は又落ち着きを取りもどし、1867年の《聖ユルゲンにて》以降ほとんど毎年のように創作の筆が進められた⁽⁷⁴⁾。

この頃ささやかな《楽興の時》のひとこまが伝えられている。1867年夏、シュトルムは同じ北ドイツの詩人クラウス・グロート⁽⁷⁵⁾と知り合う。その文学談議はもち論重要であったろうが、特に優雅で美しいグロート夫人に心をひかれ、その夫人のピアノ伴奏で歌うことができて満足であった⁽⁷⁶⁾。

ところで、この秋にはフーズムは今度はプロイセンの支配下に入り、シュトルムは州知事を辞し地区裁判所の裁判官となる。俸給はもち論大巾に減少したらしい。しかしその代りに時間的には余裕が出て来た。シュトルムはこの頃《私の最大の喜びはハイリゲンシュタット時代のように、私の合唱団です。私たちは近く、グルックのタウリスのイフィゲーニエのだいたい半分をやろうと思っています。オレスト役のためには第一級のバリトンがいます——彼はヨーロッパの第一級の聴衆の前で、シューマンの〈ブロンデルの歌〉⁽⁷⁷⁾を歌うことができるでしょう——、ピラデスは私が、イフィゲーニエ役にはすぐれたソプラノがいます。…》とピーチュに伝えている⁽⁷⁸⁾。

彼はより熱心に合唱団に情熱を傾けているのである。合唱団が《最大の喜び》という表現はそれをよく表わしている。このイフィゲーニエは、かつてリュベックでのヘルマンの演奏曲目の中にあつたものである。合唱団の活動の様子は、その後ライネッケやシェーラーなどの文通の中に反映されている⁽⁷⁹⁾。

ゲルトルトの回想によると、この頃また、シュトルム家では《4時のお茶会》が友人・知人たちをひきつけている。シュトルムは本を片手に現れ、お茶のカップもそのまま片付けずに——シュトルムはこの状態を快適なものとして好んだらしい——彼は低いが《音楽によって支えられているような声で》朗読したという。かのフォンターネも《彼が朗読すると、遠くでヴァイオリンにでも伴奏されているように響いた。》と感想を述べたことが伝えられている⁸⁰⁾。シュトルムの音楽性的一端を示すものであろう。

やがて有名なライネッケとの文通が始まる⁸¹⁾。ライネッケは有名なライブチヒのゲヴァント・ハウスの指揮者で——ニキッシュの前任者——又その音楽院のピアノと作曲の教授でもあった。ライネッケの父が師範学校の先生をしていたゼーゲベルク——コンスタンツェの実家がかった——で共に歌ったりした関係で、その有名な息子とも交流することになった。ライネッケは、今日我国では知られることは少ないが、当時は指揮者、作曲家として、又ピアノではモーツアルトの演奏家として高名であった。この文通は、シュトルムの音楽生活に大きな影響を及ぼしたと思われる。1868年5月から83年までに及ぶ往復書簡には、詩人の音楽生活を反映する記述が多数含まれている。

5月28日の最初のライネッケの書簡には、シュトルムが贈った小説——何かは分からない——へのお礼として、自作の《くるみ割りの音楽》とカールのためにバッハの楽譜を贈ったことが伝えられている。ライネッケはバッハの楽譜も編集・刊行していた。更に同年の6月19日付の書簡には、オペラの台詞を書いてもらいたいという希望も見える。しかし、これに対してシュトルムは、どのように返事したのか分かっていないし、又これは実現してはいない。更に、7月25日には7人の子供を残してライネッケ夫人が他界したことが伝えられ、これに対してシュトルムは、8月14日、自分の3年前のことをふり返って慰めの書状を認めている。

さて、音楽的に特に興味深いのは、1868年12月6日の書簡である。この中で、シュトルムは彼の合唱団のために助言を求めている。まず、当時の彼の合唱団の状況が報告されている。それによると、団員は約50人、しかし急に優秀なソリストたちがいなくなって——多分転居したのであろう——困っている、ソロはシュトルム以外にはできる者がいないこと、但しその声もコンスタンツェがいなくなってからは人を惹きつける力は失ってしまっている、でも非常の場合は何とかなる、又余り困難でないアルトとソプラノのソロは何とかなると思うと伝え、更に、このような状況で、余り長くなくて、何か適した作品——最近の *neuere* 曲が最も好ましいが——を推薦してもらえないかと頼んでいる。《最近の》作品が好ましいという表現は、この詩人の意欲的なものを感じさせて注目される。

更に、ここには、これまで演奏した作品が挙げられているが、シュトルム及び当時の人びとの好み分かって面白い。それは、メンデルスゾーンの讃歌や詩篇、世俗的合唱曲、シューマンの《流浪の民》——これには特に合唱団で好まれていたという注釈がついている——や4冊のロマンス (op. 67, 75, 145, 146)、ガーデ《魔王の娘》⁸²⁾、ヘンデル《サムソン》の大部分、グルック《アウリスのイフィゲーニエ》の3分の1、モーツアルトやハイドンの小品、ヒラー《聖霊降臨

祭》⁸³などである。

又、次の新年の演奏会——このために助言を求めている——予定のプログラムとしてはメンデルスゾーン《三つの民謡》と《夏の歌》(op. 50, 3)、リーツ《戦の歌》⁸⁴、シューマン《荒野の少年》⁸⁵——この朗読はシュトルムが行う——、ヴェーバーの《プレツィオザの音楽》を計画していると伝えられている。なお伴奏にはピアノしか用いられないことを断っている。

この依頼に対し、ライネッケは、既に翌日の日付で早速にも数々の作品のリストを含む返信を認めている。ケルビーニ、ガーデ、ハウプトマン⁸⁶、ヒラー、メンデルスゾーン、ラモー、シューマンなどの作品が挙げられている。又ライネッケ自身の作品も、女声合唱曲なども含めて7曲ばかり推薦している。

シュトルムは、この中からライネッケの《テノールと合唱のための宗教的夕べの歌》(op. 50)と、ガーデの《春の使い》⁸⁷などを選んでいる。テノールの独唱はシュトルムが受持ったのであろう。

このコンサートのことは1869年1月28日の息子のハンスにあてた書簡に伝えられているが⁸⁸、これによるとシューマンのピアノ伴奏付デクレーションは、当時オルガニストとしてフーズムに赴任したばかりのメラー⁸⁹がピアノを弾いている。又このメラーの作曲になる、シュトルムの《ナイチンゲール》⁹⁰がソロと合唱で歌われたもののようである。そしてシュトルムは《合唱団はかつてないくらい今は盛んです》と述べてもいる。

更に、後のシェーラーあての書簡でも⁹¹、ブラームスの《ワルツ》や《愛の歌》、メンデルスゾーンの《ローレライ》の終曲などを歌っていると伝えられ、《小さな町では、家庭で焼くパンのように、音楽もみんな自分でやらなくてはなりません》と結んでいる。

さて、ライネッケは後にシュトルムの三男のカールが、音楽学校に入学する際にも世話をしているが、又1874年11月にはコペンハーゲンでの演奏会の帰路フーズムにも立寄り、コンサートを開き、又シュトルムやそのサークルの人びとと親交を暖めている。

この頃、ひとつの注目すべき音楽シーンが伝えられている⁹²。つまり、1868年の秋には、シュトルムは子供のカールやリスベトと共に、あのメラーの所で和声学を学んでいる。そして、同じ頃デートマンなる詩人の詩にシュトルムがメロディを付け、カールが和声を付けたと伝えられてもいる。なお、この和声学のレッスンはカールがライプチヒの音楽院に行くまで続いたものと推定される。

この三男のカールは1871年、音楽の道へ進もうと決心する。今やカールは、シュトルムの音楽生活にとって、合唱団とは全く別の意味で大きな関心事となる。詩人は早速にも、ライプチヒのライネッケに相談している⁹³。シュトルムは、ここで、分相応のまじめなオルガニスト兼ピアノ教師にできればいいと希望を述べている。そしてカールには速やかな把握力と集中力が欠けているが、このような者にもライプチヒ音楽院は、その教育の機会を提供しているかどうかと、かなり謙虚にたずねている。更にライプチヒ音楽院出身のメラー氏について、クレメンティのソナタやツェルニーの練習曲、又リヒターのハンド・ブックによって理論などのレッスンを受けている

と伝えられている。

これに対し、ライネッケは《ライブチヒ音楽院は、ヴィルトゥオーゾよりも、一般の有能な音楽家養成に重きをおいていますから、あなたの息子さんには丁度いいでしょう》と早速にも愛想のいい返事を送っている⁽⁹⁴⁾。そして個人的にも歓迎する旨が記されている。こうしてカールはライブチヒに行く。しかしライブチヒ音楽院には余りなじまなかったらしく、ここでの成果は上がらなかった。又ライネッケの親切な申出にもかかわらず、この大家にも近付かなかったようである。そして1873年にはシュトゥットガルト音楽院に転じている。

ここでは、1866年以来文通していた、詩人で文学史家のゲオルク・シェーラー⁽⁹⁵⁾の世話になっている。その数度の書簡の中で、シュトルムは実に細ごとと息子の世話を頼んでいる。その関係で1873年12月にはその成績についても報告している⁽⁹⁶⁾。特にシュトルムは、そのピアノ演奏の成績の《充分ではない》*recht wenig befriedigend* が気がかりだったようである。やがて1874年頃、シュトルムはカールから将来についての絶望的な手紙を受取ったらしく、非常に心配すると同時に《静かな音楽家》を書くきっかけを与えられたのであった。

このカールの手紙は、今日残されていないが、これに対するシュトルムの返事が残されている⁽⁹⁷⁾。《集中力がないのは私からの遺伝であるし、私もしばしば悩まされてきた。しかし、そのような個性の弱点は、何とか克服するようにしなくてはならない。忠実で勤勉であるように……先生のクリューガーさんには、お前のことを誤解しないように、明日のうちにとてもいい書面を書いておく。あとは、ともかくも勉強を続けなさい。たとえ、特別なピアノ演奏家の才能がなくても、でも音楽の理解の能力はあるし、私は思うのだが、先生としての素質もある。そして正直でしっかりした人間であり続ければ——これは知っての通り音楽家では稀なことだが——きっとこの世の中で、お前の職も見つかるだろう。》と将来のことを心配している。この後には、更にフーズムのメラー氏がどのくらい稼ぐか、そして、それで、つましやかになら、充分暮して行けるとまでいっている。《将来についての深刻な不安をいただく必要はない。元気を出して、何か苦しい事があっても黙っていないで手紙を寄越しなさい》と結んでいる。

彼はこの手紙を出した後、大いに息子のことを心配して、あのささやかな境遇に満足する《静かな音楽家》という作品で、ひとつの解決を試みたのであった。ドロテアとの体験から生まれた《三色すみれ》*Viola tricolor* とこの作品を最も神聖なものと述べているのも注目されよう⁽⁹⁸⁾。自らの深い体験から生れた作品であったからであろう。実際のカールは更にベルリンで学び1878年、オルデンプルクのファレルで音楽教師となっている。この夏、シュトルムはカールをここに訪ねて、その活躍振りに満足している⁽⁹⁹⁾。

シュトルムはこのように子供の音楽教育という面でも、自ら教えもし、又いろいろ配慮したのであるが、中でもカールをめぐる体験は、音楽がかならずしも喜びだけではなかったことを意味しているであろう。

VII ハーデマルシェンでの晩年

カールが落ち着いた後、シュトルムは間もなく引退して、フーズム南方のハーデマルシェンに隠棲することになる。1880年の春、彼は合唱団の最後の指揮をし、美しく彫刻されたクルミの木の楽譜台と象牙と黒檀でできた指揮棒を贈られている⁽¹⁰⁰⁾。

ハーデマルシェンではまさに悠々自適の生活で、散策を楽しみ又、思う存分詩作に耽けるのである⁽¹⁰¹⁾。そしてやはり合唱団こそ組織しなかったが、音楽は忘れなかった。

この年のクリスマスにはあのカールがやって来て、フォンターネの詩によるレーヴェのバラード《ダグラス》*Douglas* を歌い、ルツィエとカールがライネッケの《くるみ割りの音楽》のピアノを弾き、テキストをシュトルムが読んでいる⁽¹⁰²⁾。

又毎年冬の学校でのコンサートには、シュトルムも協力し、例えばかつても演奏したことのあつるシューマンのピアノ伴奏付きデクラメーションなどの朗読をしている。又この演奏会では親しくしていた知人のソプラノがシューマンの《セレナード》、《献呈》やモーツァルトのフィガロのアリアなどを歌い好評を博している⁽¹⁰³⁾。

更に、子供の音楽教育にも依然として関心を示している。今は末っ子のドードーに毎日1時間歌を教えている。時々二重唱も歌うのであつた。

この頃のシュトルム家での集いについて、興味深い回想が残されている。それは末娘の先生のユルゲンゼンによるものである。

《夏はヴェランダで、冬は居間でのお茶の会によく出かけました。連絡しないで出かけてもシュトルムは喜んで迎えてくれました。ケラー、ハイゼ、イェンゼン⁽¹⁰⁴⁾の書簡や、送られて来ていた原稿などが読み上げられました。晩にもよく出かけましたが、食事の後には熱心に音楽が演奏されました。シュトルム家の人びとは、ごくわずかの例外を除いて、皆音楽的でした…私はシュトルムより優れた朗読家を聞いたことがありません。多分、文学と音楽の両方の才能が、そう力強くはないが、大へん変化に富んだ声で、強く聞き手の心をとらえるのでしょう…》と彼女は伝えている⁽¹⁰⁵⁾。

もうひとつ朗読に関連して、シュトルムの豊かな音楽性を伝える回想が注目される。それは1886年シュトルムの家に客として滞在した、ある神学者⁽¹⁰⁶⁾によるものであるが、彼はシュトルムと当地の牧師館に招かれ、即興的にデクラメーションを共演している。彼が即興的にピアノを弾き、シュトルムがこれに合せて朗読したらしい。彼は《シュトルムが何の打合せもなく、すぐに音楽について来たのは、真の繊細な音楽性を持っている証拠で、それは全く驚嘆に値した》と述べている。詩集が1冊しかなく、ピアノの上のにのせられていたので、年老いた詩人はよく読みとるために、ピアノの前にひざまずき、情熱をこめて朗読している様子を見るのは、全く感動的であつたとも報じている。そして最後の日には、シュトルム家で沢山の音楽が演奏され、楽しい時を過した。

その晩年も又、いかに豊かな音楽にとりまかれていたかが分かるであろう。

やがて1887年詩人の70才の祝賀パーティーが祝われ、もち論音楽は欠かせなかった。しかし、

詩人の終りが近づいていた。この年のクリスマスには、カールのピアノに合せて、シュトルム家の全員が《聖夜》を歌うのであったが、一節目の最後の《しあわせな安らぎのうちに眠れ》というところで、シュトルムはそれ以上歌わないようにといい、目には涙を浮かべていたといわれている⁽¹⁰⁷⁾。数年前から病を得ていた詩人は、多分最後のクリスマスを予感したのであろう。

翌年初めにはシュトルムは久し振りにフーズムに出かけ、かつての合唱団を訪ねている。そして今はなきメラー——メラーは1887年に亡くなった——の作曲による自作《ナイチンゲール》を自ら指揮したと伝えられている⁽¹⁰⁸⁾。最後の《楽興の時》であった。そして、これが合唱団との別れともなった。そして2月9日には、病を押して書き進められていた最後の大作《白馬の騎手》*Der Schimmelreiter*が完成した。この直後2月11日パウル・ハイゼにあててこの作品の完成を伝えるとともに、合唱団の最後の訪問について報告し《この合唱団はもち論今はテオドール・シュトルム合唱団といえます。……親愛なる友よ、そうです、これが小さな町での喜びというものです。それは又すばらしい味わいのものです》と書き送っている⁽¹⁰⁹⁾。

やがてこの年の7月、シュトルムは永遠の眠りにつくのである。

- 1) Moser, Hans Joachim: Musiklexikon. 2 Bde. Hamburg 1955.⁴
- 2) Theodor Storm (1817-1888) は北海沿岸のフーズム Husum に生まれ、法律家として活躍するかたわら多数の抒情詩と短篇小説を発表した。その作風は詩的リアリズムといわれる。古くから邦訳も多く刊行されている。又 Immensee は1849年発表の初期の代表作。生前30版を数え、詩人の文学的名声を高めた。
- 3) 1874/75年作。
- 4) 小説 In St. Jürgen (1867) と詩 Die Stadt (1852) に含まれる。SWW, I, 491; II, 944.
- 5) Vinçon (a), 9; Stuckert (a), 15ff.; GS, I, 29.
- 6) Nicolaus Bruhns (1665-1697) **Storm**: Renate (1877/78) で引用されている。SWW, II, 1082.
- 7) Fey, 38.
- 8) Philipp Caspar Windt (1868没), Fey, 38.
- 9) Fey, 38.
- 10) Stuckert (a), 25f.
- 11) 以下は主として Fey, 41-44; GS, I, 128ff. による。
- 12) Karl Mosche.
- 13) Adolf Nölting (1794-1856), Henriette N. (1800-1888).
- 14) Johann Anton Ferdinand Röse (1815-1859), GS, I, 109-125; Storm: Lübecker Gymnasialstanzzeit und Ferdinand Röse (SWI, II, 456ff.).
- 15) Franz Kugler (1808-1858) 詩人で美術史家。
- 16) Hermann Duncker (1812-84) 作曲家。ネルティンク夫人の弟。
- 17) Gottfried Hermann (1808 1878) シュポーアの弟子でヴァイオリニスト、オルガニスト、作曲家。リュウベックで活躍。
- 18) Andreas Jakob Romberg (1767-1821) シュポーアの後任としてゴータの宮廷楽長。ヴァイオリニスト、作曲家。
- 19) Carl Heinrich Graun (1703/04-1759) ドイツの作曲家。Der Tod Jesu は 1755 年作の受難カンタータ。
- 20) J. Carl G. Loewe (1796-1865) バラードの作曲家として有名であるが、オペラ、オラトリオも作曲した。Die Zerstörung Jerusalems は1829年作のオラトリオ。

- 21) GS, I, 150.
- 22) GS, I, 134 以下も同書による。
- 23) 本稿 100, 102 ページ参照。
- 24) Im Schloß (1861), SWW, I, 239f.
- 25) Friedrich Carl von Savigny (1778-1861) 有名な法律学者。1810~42ベルリン大学教授。
- 26) Carl Seydelmann, Vinçon, 22; GS, I, 137
- 27) Wilhelmine Schöder-Devrient (1804-1860) ドラマチック・ソプラノ。1823~47ドレスデンで活躍。
- 28) Eine Episode aus dem Berliner Studienjahr 1839, SWW, II, 855ff.
- 29) Theodor Mommsen (1817-1903) 歴史学者。ブレスラウ、ベルリン大学教授。Tycho M. はその弟。又 Karl Müllenhoff (1818-1884) は有名なゲルマニスト。文献考証で知られている。
- 30) Liederbuch dreier Freunde, 1843. シュトルム作は40篇位らしい。
- 31) GS, I, 162.
- 32) GS, I, 162f.
- 33) Kaspar Kummer (1795-1870)
- 34) Johann Wendelin Glaser (1713-1783)
- 35) Kosegarten (1758-1818)
- 36) GS, I, 163
- 37) GS, I, 163ff. 以下同書による。
- 38) H. Adolf Hesse (1809-1863)
- 39) Christian Fürchtegott Gellert (1715-1769)
- 40) GS, I, 165. に収められている。
- 41) この有力なシュトルムの助手は、僅か3年後に1847年10月女兒を出産後、あっけなく世を去る。そしてその子供も1週間後には後を追っている。GS, I, 190
- 42) Ein Lied, welches Herr Magister Antonius Wanst sang, als er den letzten Brief Vetter Michels gelesen hatte で、これはレーゼの関係していた Pilger durch die Welt なる年鑑の1844年版に載せられていた。楽譜と歌詞は Fey, 46 にある。又同45に解説がある。
- 43) この翌年にはデンマーク王を迎えるための2本のフルートとファゴットの伴奏を伴う女声合唱曲が作詩、作曲されたらしいが、楽譜は残されていないが、詩の方は残されている。Heil dir, heil dir, hoher König (SWI, I, 163) である。しかし、この演奏はデンマーク王が早目に到着するというハプニングのために、うまく行かなかったらしい。Fey, 45ff.
- 44) GS, I, 189
- 45) Dorothea Jensen はコンスタンツェ亡き後、シュトルムと結婚する。
- 46) Marthe und ihre Uhr (1847), Im Saal (1848), Immensee, Ein grünes Blatt (1850); Sommergeschichten und Lieder (1851), Gedichte (1852) usw.
- 47) Eduard Mörike: Mozart auf der Reise nach Prag.
- 48) Im Sonnenschein (1854), Angelika (1855), Wenn die Äpfel reif sind (1856)
- 49) Karl Christian Tenner (1791-1866) の Das Jägermädchen の第2節に作曲している。楽譜と詩の全部が Fey, 49 に収められている。
- 50) Heiligenstadt は Göttingen 南東の小都。ここで Am Kamin (1857), Auf dem Staatshof, Späte Rosen, Drüben am Markt, Veronika, Im Schloß, Auf der Universität, Unter den Tannenbaum, Abseits, Bulemannshaus, Von Jenseits des Meeres (1864) などが書かれた。
- 51) GS, II, 74ff.
- 52) BiH, 143f.
- 53) GS, II, 77 によると、1859年クリスマスに父はシュトルムにピアノ代を贈ったという。
- 54) Ludwig Scherff はハンブルクの母方の親戚の作曲家。シュトルムの Die neuen Fiedellieder

- (1871), SWW, II, 885ff. を作曲している。
- 55) Louis Ehlert (1825-1884)
- 56) Die erste Walpurgisnacht, op. 60
- 57) GS, I, 167; An Auguste von Krogh (SWW, II, 1001)
- 58) BiH, 192f.
- 59) 多分 Jahreszeiten《四季》の夏に含まれる Ach, das Ungewitter naht であろう。《静かな音楽家》のヴァレンティンのピアノの上には《四季》のスコアが開かれていた。
- 60) Ferdinand Hiller (1811-1885) はドイツの作曲家。1840年メンデルスゾーンの招きで、彼はライブチヒでこの Die Zerstörung Jerusalems を初演し、大成功を収めたといわれている。
- 61) GS, II, 94f.
- 62) BiH, 129ff. 次の書簡もこれに続く。
- 63) GS, II, 91, Ludwig Pietsch とはベルリン時代に知合った。
- 64) GS, II, 93; BiH, 200 (20. Sept. 1863)
- 65) BiH, 217f.
- 66) ib.
- 67) Eduard Spranger: Rede über die Hausmusik. Kassel/Basel 1955, 38
- 68) GS, II, 112f; Schnass, 13f.
- 69) GS, II, 113. Tiefe Schatten (SWW, II, 925ff.)
- 70) GS, II, 115; BiH, 210 (29. Dez. 1863)
- 71) 31. Okt. 1865, nach Schnass, 22
- 72) GS, II, 117; Schnass, 19ff. (11. Sept. 1865) 以下もこれによる。
- 73) Pauline Viardot-Garicia (1821-1910) はフランスの歌手でメゾ・ソプラノ。夫は劇場監督。1859年以降バーデン・バーデンに住む。歌曲、オペレッタの作曲もあるという。
- 74) Eine Halligfahrt, Viola tricolor, Ein stiller Musikant, Psyche, Aquis submersus, Carsten Curator, Renate, Zur Wald- und Wasserfreude, Ekenhof, Die Söhne des Senators usw.
- 75) Klaus Groth (1819-1899)
- 76) GS, II, 140
- 77) Blondels Lied, op. 53, 1
- 78) 8. Nov. 1867, nach Schnass, 39
- 79) 以下を参照されたい。
- 80) GS, II, 146
- 81) Carl Reinecke (1824-1910) その往復書簡は文献 Reinecke による。
- 82) Niels Wilhelm Gade (1817-1890) デンマークの作曲家。Erlkönigstochter は op. 39 のカンタータ。
- 83) Pfingstsfeier op. 119 のオラトリオ？
- 84) Julius Rietz (1812-1877): Altdeutscher Schlachtgesang für einstimmigen Männerchor und Orchester. op. 12
- 85) Hebbel: Heideknabe による Schumann のピアノ伴奏付のデクラメーション Deklamation, op. 122, 1 (1852). MGG: Deklamation に一部コピーが収められている。
- 86) Moritz Hauptmann (1772-1868) 作曲家、ライブチヒ音楽院教授もつとめた。
- 87) Frühlingsbotschaft, op. 35 (1858)
- 88) 28. Jan. 1869, nach Schnass, 44
- 89) Adolf Möller (1841-1887) はライブチヒ音楽院の出身で1868年フーズムに来る。早速シュトルムの合唱団の協力者となる。又カールのピアノを教えたり、更にシュトルムに和声学を教えることになる。以下参照。又Fey, 49ff. に略歴がある。
- 90) Nachtigall, SWW, II, 902

- 91) Scherer, 35 (19. Okt. 1873)
- 92) Fey, 49; Schnass, 43
- 93) Reinecke, 51 (17. Jan. 1871)
- 94) Reinecke, 52f. (19. Jan. 1871)
- 95) Georg Scherer (1824-1909), Scherer, 15ff.
- 96) Scherer, 37 (21. Dez. 1873)
- 97) Herrmann, 633f. (3. Dez. 1874)
- 98) an Westermann, 8. April 1875, nach Schnass, 82
- 99) GS, II, 187
- 100) GS, II, 192f.
- 101) Hans und Heinz Kirch, Schweigen, Zur Chronik von Grieshuus, „Es waren zwei Königs-kinder“ (これはある民謡の題であるが、作中にこの民謡のメロディがシグナルとして用いられる場面があり、又楽譜が印刷されている。なおこの素材は、カールのシュトゥットガルト時代のある音楽院生の悲劇からとられた。), Ein Fest auf Haderslevhuus, Bötjer Basch, Doppelgänger, Ein Bekenntnis, Der Schimmelreiter などが書かれた。
- 102) GS, II, 201
- 103) GS, II, 206: Schumann: Ständchen は op. 36, 2 (Reinicke), Widmung は op. 25, 1 (Rückert), Mozart: Figaro は Susanna の Nr. 27 のアリア。
- 104) Wilhelm Jensen (1837-1911) 北ドイツの作家。
- 105) Elfriede Jürgensen, nach Schnass, 121f.
- 106) Carl Hunnius, nach Schnass, 157
- 107) GS, II, 237; Schnass, 169
- 108) Fey, 51
- 109) an Heyse, 11. Feb. 1888, nach Schnass, 173

参 考 文 献

- Bernd, Clifford Albrecht: Theodor Storm. In: Deutsche Dichter des 19. Jahrhunderts. Hrsg. von Wiese. Berlin 1979²
- BiH=Storm, Theodor: Briefe in die Heimat aus den Jahren 1853-1864. Hrsg. von Gertrud Storm. Berlin 1914
- Fey, Hermann: Theodor Storm als Komponist. In: STSG 6, 1957, 38ff.
- GS=Storm, Gertrud: Theodor Storm. Ein Bild seines Lebens. 2 Bde. Berlin 1912
- Herrmann, Walther: Die Entstehung von Theodor Storms Novelle „Ein stiller Musikant“. In: Euphorion Bd. 22. 1915, 632ff.
- MGG=Die Musik in Geschichte und Gegenwart. 16 Bde. Kassel/Basel 1949ff.
- Reinecke:Theodor Storm und sein Landsmann Carl Reinecke. Hrsg. von Hermann Fey. In: STSG 5, 1956, 43ff.
- Scherer, Georg: Theodor Storm. Briefe an Georg Scherer und Detlev von Liliencron. Hrsg. von Stuckert. In: **STSG** 3, 1954, 15ff.
- Schnass, Frank: Theodor Storm. Bittersüßer Lebenstrank. Ein Dichterleben in Selbstzeugnissen, Briefen und Aufzeichnungen. Ebenhausen bei München 1952
- Stockmeier, Wolfgang: Theodor Storm. In: MGG
- STSG=Schriften der Theodor-Storm-Gesellschaft. 1952ff. bisher 28 Bde.
- Stuckert, Franz: Theodor Storm. Sein Leben und seine Welt. Bremen 1955 (a)
-: Theodor Storm. Der Dichter in seinem Werk. Tübingen 1966³ (b)
- SWI=Theodor Storm Werke 2 Bde. Frankfurt/Main (Insel) 1957

SWW=Theodor Storm. Sämtliche Werke in zwei Bänden. München (Winkler) 1967

Vinçon, Hartmut: Theodor Storm in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten. rohwohls mono-graphien 186. Reinbek bei Hamburg 1972 (a)

..... : Theodor Storm. Slg. Metzler 122. Stuttgart 1973 (b)

Wilpert, Gero von: Deutsches Dichterlexikon. Stuttgart 1976²